

北海道新ひだか町静内収集の編袋

—新ひだか町博物館所蔵資料の紹介—

大坂 拓

- 目次 1 はじめに
2 資料の特徴
3 課題

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、編袋 (Basket)、新ひだか町静内 (Shizunai)

1 はじめに

本稿では、新ひだか町博物館所蔵資料の中から、特異な製作技術が認められる編袋1点について、その特徴を紹介する。

本資料（収蔵番号11296）は、2008年7月15日付けで新ひだか町静内御園に在住する個人から新ひだか町博物館へ寄贈された資料22点に含まれていたもので、寄贈者が近隣に居住した女性から首飾りや漆器とともに譲り受け、保管されていたとのことである。寄贈者が譲り受ける以前の所有者に関して、氏名等は明らかになっていない。

2 資料の特徴

(1) 概要

丸底で、体部は口縁部にかけて僅かにすばまり、底径17.7cm、高さ14.0cm、外周は体部下端で58.0cm、口縁部で46.5cmである。

本体は靱皮繊維を素材とする編み物で、口縁部は褐色と紺色の二種の木綿布で挟み込み、S撚り2本を合わせたZ撚りの靱皮糸で縫い留めて補強している。

口縁部内面には靱皮繊維の組み紐を縫い留め、提げ紐としている。この提げ紐は、S撚り2本を合わせたZ撚りを7本編み[1-2/2/2]にしたもので（写真7）、全長は62cmである。中間には、動物の筋繊維とみられる半透明の繊維束が結び留められている。

他に、口縁部に木綿布片が2箇所一対をなして縫い留め

られていることが確認され、現存する提げ紐の前に付属したものの端部である可能性がある。

(2) 製作技術

本体の製作技術は、tarと呼ばれる荷縄やemus'at刀帯、sianpa ker死者用靴に用いられている技術と共通し、経糸に緯糸2本をもじり編みにするもので、底部は「技法A1」、体部は主に「技法B1」（大坂2017）で編まれる。経糸は、主にZ撚り2本を合わせたS撚りが使用されており、一部にS撚り2本を合わせたZ撚りが混在する。素材は肉眼観察ではイラクサないしツルウメモドキに類似する⁽¹⁾。経糸の本数は底部の中心から外縁にかけてU字形に折り曲げた経糸を追加する手法で増しており、底部外縁では243本となる。

緯糸は、撚りをかけない靱皮繊維で（写真3・4）、底部外面の観察から、中心部から時計回りの螺旋を描くように編み進めていったものと推測される。黒色に染色したものと染色を行わないものの2種を使い分け、同心円状や連続する山形の文様を編み出しており、同心円状の文様の部分では緯糸2本に同色を用い、その他の文様の部分では黒色に染色したものとしいないものの2本を組み合わせていることから、文様のパターンが変化する部分で緯糸の素材を切り替えていることが分かる。

部分的に、緯糸が現存せず空白のように見える部分が認められるが、一部に黒色に染色した靱皮繊維が部分的に残存している状況が観察されることから、製作された時点では空白はなかったものと推測される。このような空白が生じた理由としては、黒色の染色に鉄分を含んだ

大坂 拓：北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

(1) 靱皮繊維の同定は、多くの場合、肉眼観察によって経験的に行われているが、それぞれの繊維の加工方法のバリエーションによって生じる性状の差異などは十分に明らかになっているとは言い難く、顕微鏡観察などを用いる方法の確立が今後の課題となっている。ここでは、筆者が加工を経験した範囲で、繊維の性状が資料と類似する植物名を列記しておくにとどめる。

沼への漬け置きを用いたため、繊維の強度が低下し、劣化が相対的に早く進行した可能性が考えられる。

そのほか、体部側面に複数箇所、赤褐色を呈する獣毛の可能性のあるもの（写真6）が編みこまれた部分が認められる。

3 課題

本資料は、現在のところ日本国内のアイヌ民族資料に類例が知られておらず、アイヌ民族が製作したものなのか、周辺地域から入手して使用したものなのか明らかではない。

現存するアイヌ民具に見られる靱皮製品の大部分は、S撚り2本を撚り合わせたZ撚りが圧倒的に多く、主に女性が製作するZ撚りの紐と、男性が製作するS撚りの縄は明確に作り分けられているものと考えられていることから、本資料の経糸は、撚り方向の点でイレギュラーなものとなる。

緯糸の編みについても、刀帯では資料の年代差に関わらず、技法A1、B1ともに編み目が右下がりとなるものが圧倒的多数を占めることが明らかになっているが（大坂 2017：11）、本資料は全体が右上がりをなしており、やはり特異な事例といえることができる。

以上の点からは、本資料がアイヌ民族以外の手によって製作され、アイヌ民族が入手した後、口縁部の補強や提げ紐の付加をおこなったという可能性も、それほど低く見積もる訳にはいかない。

ただし、撚りの方向と編みの方向がともに多くのアイヌ民具と反対となるのは、製作者が左利きだった可能性など、個人的な癖が反映されている可能性もあり、アイヌ民具の一つとして、こうした資料が存在した可能性もまた、低くはない。

ここで筆者が着目しておきたいのは、本資料の数か所に、赤褐色を呈す獣毛が編みこまれている点である。筆者が以前行った刀帯の分析では、今回の資料に見られる獣毛によく類似した「赤獣毛」を用いた一群（I b2類）が現存する資料群の中で最古に位置づけられ、その製作年代は18世紀にさかのぼる可能性も考えられる（大坂 2017：26）。本資料が素材の面で刀帯 I b2類と共通するとすれば、本資料もまた製作年代が相対的に古く、その古さに起因して、類例がほとんど伝世していないという可能性が出てくる。宝物の一種として扱われる刀帯に比べれば、編袋は日常雑器の一種であり、古いものが伝世する確率は、より低かったとも推測できるだろう。

とはいえ、本資料に直接的に対比可能な類例が存在しない以上、1点の資料のみから言及可能なことは極めて限られており、本稿では、以上の複数の仮説が、相互に

棄却困難な形で併存することを指摘するにとどめ、周辺地域や海外コレクションからの類例の再発見や、低湿地遺跡からの繊維製品出土事例の蓄積など、関連情報の増加を待つこととしたい。

謝辞

本稿は、筆者が平成29年度に実施した荷縄、死者用靴の調査の際に、新ひだか町博物館館長・藪中剛司氏（当時）より資料の存在についてご教示頂いたことを契機にまとめたもので、収蔵の経緯などについて多大なご教示を賜ったことを明記し、末筆ながら記して感謝申し上げます。

引用文献

大坂 拓 2017. アイヌ民族の刀帯一分類群の共時的分布と通時的变化―北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 2: 1–32.



写真1 全体



写真2 底面



写真3 表面



写真4 内面



写真5 端部補強



写真6 獣毛



写真7 提げ紐



写真8 動物の筋

MATERIALS

Basket Passed Down in the Town of Shinhidaka, Hokkaido

OSAKA Taku

This article introduces a basket made with a unique production method from resources owned by Shinhidaka Town Museum. Although the producer of the basket is unknown, since the material similar to that of an Ainu sword belt, Type Ib2 is used

for some parts of the basket. It may be considered as an old type of basket produced with a production method which has not been introduced until now.

OSAKA TAKU : Ainu Culture Group, Ainu Culture Research Center, Hokkaido Museum